

アナグマとぼく

倉敷市立菅生小学校

三年生 渡邊 奏介

「みゃあ、みゃあ。」

ぼくが おばあちゃんの家の物おきで遊んでいると、おくの方から子ねこの鳴き声が聞こえてきました。ぼくは子ねこが見たかったので、鳴き声のするあたりに行ってみました。子ねこのすがたはありませんでした。

そのことをおばあちゃんにつたえると、

「おなかがすいとるかもしれんけん、えさやっときい。」

と言ったので、ぼくは、かつおとかにぼしとか、ねこがすきそうな物をうつわにいっぱいに入れて、ねこの鳴き声がするあたりにおいてやりました。

しばらくして見に行くと、ぼくがいらていたうつわのなかの

えさが全てなくなっていました。あんなにたくさんあげていたえさを全部食べていたので、よっぽどおなかが空いていたんだなと思いました。

そして次の日もぼくは、ねこにえさをやるため、物おきに行きました。この日も元気なねこの鳴き声がかけていましたが、やっぱりねこのすがたは見る事ができませんでした。

そろそろもどるかと思ったとき、いきなり、物と物のすきまから、大きなアナグマが、にゅるとぼくの目の前に出てきたのです。ぼくは、野生のアナグマを見たのがはじめてだったので、びっくりしてしまい、かたまってしまいました。

するとアナグマは、ぼくのかたまった顔がこわかったのか「ころさないで」と不安そうな顔をして、急いでおくに入ってきました。

ぼくは、走っておばあちゃんの所に行き、

「大へんじゃ、ねこじゃなくてアナグマがおる。」

と言いました。そして、おばあちゃんと一しよにさっきアナグマが出てきた場所に行きました。

しばらくすると、アナグマが一しゅんだけ顔を出し、おくに入って行きました。おばあちゃんは、

「ありゃあねこの子じゃのうて、アナグマの子の鳴き声じゃったんじゃな。」

「あぶないけ、もう行かれな。」

と言いました。

だけど、ぼくは、どうしてもアナグマが気になったので、その次の日もえさを持って物おきに行きました。すると、そこには、空っぽになったうつわと大きなフンが一つありました。だけど、もういくら耳をすましても鳴き声どころか物音一つしませんでした。ぼくは、アナグマがいなくなっていました。分かったので悲しい気持ちになりました。

ぼくは動物がすきななので、どんな動物にも意地悪をすることはありませんが、中には、動物に意地悪をする人がいるかもしれません。だからこそきつと、ぼくと会ってしまったアナグマは、「ころされる、何かされる」ときょうふを感じて、ここにはすめないと思っけて子どもをつれて出て行ってしまったと思いました。

でも、大きなフンは、すみかを追われたことにたいするぼくへのいかりではなく「えさをくれてありがとう」という感しやのしるしだと思いました。そう思うと、アナグマがいなくなっ

て悲しかった気持ちが少しだけ軽くなったような気がしました。おばあちゃんの家は、山おくなので、さるやイノシシ、きじなど、とにかくたくさん動物がいます。でも、おばあちゃんにはアナグマは今まで一度も見たことがないと言っていたので、見たことがない動物を見かけるといことは、それだけ、山の中が住みにくくなって、えさがなくなってきているんだろうなと思えました。だから、ぼくは、自分が動物だったらどんな所に住みたいか、動物目せんでいろんなことを考えて、動物のみかをなくさないようにしたいと思います。そうすればきつと、物おきみたいな、アナグマにとってこわいそんざいの人間のそばではなく、生まれたときから、何かにおびえることのない自ぜんの中でのびのび大きくなれると思います。